佳作

「厳冬の朝の記憶」

望月　正明さん

まさに吐く息も凍る寒い朝、父は逝ってしまった。娘の年齢と重なる三八年前の記憶である。

「丈夫で健康」の印象が強かった父が、その日を遡ること一年余、町の集団健診で異常が見つかり即入院して間もなく手術となった。手術が終わると主治医から胃癌だったことを告げられた。当時癌は治る見込みのない病気で、告知ということがタブー視されていたような中、精神的な負担も考慮しながら主治医と相談して胃潰瘍の手術ということを父に告げた。

しかし、一向に快方に向かわず次第に衰えていく父に、本当の病名を知らせることの是非について悩み、遂には最後まで言えなかった。そのことが今でも後悔として残っている。

健康であるとの自信と、仕事の忙しさを理由に、健診ということをあまり意識しなかった父は、母の勧めで何年か振りに受診した。そこで癌が見つかったが、すでに末期であった。

手術後今度は肝臓に転移し、希望もなく再度病床に伏してしまった。当時私は結婚、子供の誕生と自分の生活中心で、父の体調の異変にも気付かず、ましてそんな病気に侵されているとは努々思わなかった。

あの頃は本人には勿論のこと周りの人も癌という話題は出しにくい風潮にもあり、秘かに治療の情報を探した。M博士のMワクチンが大きな話題となっていたので、藁をもつかむ思いで主治医に相談した。『それは家族の責任でやってください』と、希望の灯が消えるような返答だった。それでも試すに値すると思い、東京の大学病院に通い、その特効薬を購入して主治医に並行治療をお願いした。

その薬の効果のほどはわからないまま、年が変わったばかりの二日の夜半、急変の知らせに覚悟した。クリスマスの日の大雪が残した寒さの厳しい年明けで、病院の入り口の温度計は氷点下八度だった。その寒さは父の死に直面した

時の虚しさと重なり、今でも鮮明に覚えている。

そして父の病気に対して、為す術を持ってないこと、本当の話ができなかったことが罪のように思えた。そこには懸命に看病した母の落胆の姿があったが、五十九歳のあまりに早い父の死に、先行きに対する不安の気持ちと悲しさで、ボーと眺めていた窓の向こうに、夜が明けていく八ヶ岳が霞んで見えた。

最近の医学の進歩は目覚ましく、癌さえも恐れるに値しない病気となったと言われている。しかしそれはあくまで医療現場での話である。健康で暮らしたいとする欲求は生きている限り誰でも持っている。そして、病気というリスクから逃れるためには、自分の体の状態を定期的に知ることが大切だ。

父の逝った年齢近くになったとき、健康のことが殊更気になった。そして父のそれを超えたとき、安堵の気持ちの一方でその理不尽な人生を思った。突然にして人生を絶たれること。残す家族への思い。そしてもしも、定期的に健診を受けていたならば・・・。

以来私は妻の強力な後押しもあって定期的に受診することは勿論、設備の充実した「人間ドック」を受けている。日常の生活に対する体調の管理や、癌をはじめとする重大な病気でも早期発見につながり、後の治療にも大きな効果が期待できる、そんな可能性を信じている。近頃「早期発見だったから、今がある」という体験談を聞くことが多くなった。健診という機会が与えられているにもかかわらず、父のような結果にならない為にも。そんな思いで欠かさず受診している。

あの頃母は『あと五年すれば、お父さんの癌は治癒できる時代になる』と、自分の少ない医療知識の中で時代を恨んでいた。そして今、気丈に看病した母が、父が失った人生の分も健康で過ごしている。私の幸せだ。